

書評

本間長世『共和国アメリカの誕生— ワシントンと建国の理念』

(NTT 出版、2006 年)

古 矢 旬

管見の限りでは、本書の著者はアメリカ合衆国を「理念の共和国」と呼んだ日本で最初のアメリカ研究者である。すでに30年ほど前にこのタイトルの下に出版された論文集の冒頭において、著者は次のように述べている。¹⁾

マサチューセッツ植民地のピューリタンたちは「丘の上の町」を築いてみずから課した使命を果たそうとしたし、独立革命の指導者たちは、独立宣言において建国の理念を表明して「アメリカ」評価の尺度をみずから示した。アメリカは理念の共和国として出発したのであり、したがって、理念と現実とのずれを指摘される運命をみずから与えざるを得なかった。しかもこの理念が、移民の国において新来の移民をアメリカ社会に同化する原理となり、膨張を続ける連邦国家の統合の原理となった。・・・アメリカをアメリカたらしめてきたのはアメリカの理念なのであって・・・それだからこそアメリカは、その巨大な物質文明にもかかわらず、一種の観念性ないし抽象性を漂わせ続けているのである。

ここにいう「理念の共和国」とは、もとよりたんなる呼称ではなく「アメリカ」という巨大な現象への一つの接近視角を意味する。すなわち著者の言によるならば、この呼称の根幹には、アメリカ史の展開に特有な「理念と現実」との間の矛盾相克や、またアメリカの理念が「アメリカの独自性を支える原理であると同時に、アメリカを越える普遍性を指し示すという逆説的緊張」への着眼が潜んでいる。そしてそれこそは著者が半世紀以上にわたり戦後日本のアメリカ研究のパイオニアの一人として積み上げてきた膨大な業績群を貫く一つの中心的問題視角にほかならない。

本書において著者は、アメリカ合衆国史上最大の危機を主題とした前著『正義のリーダーシップ——リンカンと南北戦争の時代』²⁾ からさらに時代を遡り、まさに著者のアメリカ研究の中核にあり続けてきた「理念の共和国」の起源を、現実の革命と建国の歴史過程に即して再現する作業に取り組んでいる。あらためてアメリカ史を遡り、共和国の統合理念の創出過程に着目するという本書の課題設定と方法的枠組みが、一つには現在のアメリカ、すなわち「9.11 事件」以後のアメリカ国家の行動とその動機に見られる独善性を、その国家の初発の政治的理念に照らして根本から批判しようとするという（これも前著から引き継がれた）動機に触発されていることは疑いない。しかし思えば、危機の時代における

¹⁾ 『理念の共和国——アメリカ思想の潮流』（中公叢書、1976年）、まえがき。

²⁾ NTT 出版、2004年。

創造的なリーダーシップのあるべき姿を模索し、社会に向かってそれを提示するという実践的課題もまた、占領期にアメリカ研究を開始した著者（そしてわが国の戦後アメリカ研究の草創期の多くの研究者たち）の学術研究に一貫するものであった。

しかし、本書の問題設定には、こうした知識人としての実践的関心と並んで、学術としてのアメリカ研究の現状に対する、先行者からのいくつかの問いかけが含まれているようにも思われる。たとえば、著者自身が「まえがき」において本書を紹介するに当たり、繰り返し「物語」という言葉を用いていることから推しはかれるように、ここでの革命史、建国史の叙述は、この分野の先端的な個別専門研究の成果を活かし、それら個別研究であきらかにされた歴史の細部を、あらためて一つの「物語」として再構成しようとする、いわば「総合」や「大きな物語」への意志に支えられている。この点に、大きな物語の「脱構築」を訴えるポスト・モダンな研究が隆盛を極める現在のアメリカ学界に対する反批判と物語の復権を促す問題提起を感じるのには評者だけであろうか。

また、本書はその副題が示唆するように、あえて独立革命と建国の展開過程を政治史として、しかもアメリカ植民地の啓蒙主義的エリート層の思想実践と「上からの」政治的リーダーシップに主眼をおいて描いている。それは、近年の社会史的なアメリカ革命理解の視角とは明らかに対照的である。この点でも、著者のアメリカ革命論は、近年の多文化主義やポスト・コロニアリズムが支配的なアメリカ研究における近代批判、啓蒙批判、統合的ナショナリズム批判の過剰に対する異議申し立てを含意しているかに見える。こうした批判の内に、あるいは人は「アメリカ政治の天賦の資質」に着目し、アメリカ革命の統合的側面や保守的側面を強調したかつてのコンセンサス史学——まさに著者のアメリカ研究者としての出立を促した研究潮流——の長い影を認めるかもしれない。

最近までのいわゆる新社会史家たちが、民衆による抗議運動や抵抗運動の旧秩序破壊的な性格に着目し、アメリカ革命の急進性、過激性を強調するのに対し、本書は、そうしたラディカルな民衆的運動を巧みにコントロールしつつ本国の支配秩序からの分離独立をはかり、独立後の新秩序の創出を導いた革命の指導的エリートたちの思想と行動に主眼を置いている。したがってここにおけるアメリカ革命は、大西洋をまたぐヨーロッパ文明世界からの離脱を目指す荒々しい社会的衝動とあくまでもその文明の一環としてその枠内での秩序形成をはかる政治的意志との矛盾相克の過程として再現されてゆくのである。そのような革命の展開を促したいわば「環大西洋世界」の思想動向として、著者は、一つには18世紀キリスト教世界を揺り動かした福音主義的な信仰復興を、今一つには理性と科学に信頼をおく近代啓蒙主義を強調する。

著者は「理念の共和国」という視角の提唱者にふさわしく、本書冒頭に、植民地時代からのクロノジカルな革命の推移を語るに先立って、「独立宣言」論を置いている。この構成の内に、独立宣言こそはアメリカを今日に至るまで長くアメリカたらしめてきた統合の理念的要にほかならなかったとする著者の根本的理解をくみ取ることができよう。しかしながら、ここで著者が試みていることは、たんにその結論を金科玉条として提示することではなく、何よりも「自由、平等、そして幸福の追求」に集約された独立宣言の中核的メッセージが当時のいかなる思想的伝統に倣し、いかなる時代状況から生まれてきたのかを、近年の政治史や政治思想史の知見や「建国の父祖たち」の新しい伝記的研究の成果を取り入れつつ明らかにしてゆくこと——すなわちこの歴史的文書の「(再)歴史化」で

ある。

そこには、独立を正当化するための革命権の思想的淵源やアメリカの主権の正当化、「暴君」ジョージ三世評価等をめぐる当時のエリートたちの思想的な格闘から、後にこの宣言の「オーサー」と目されるようになったジェファソンの自負とジェファソンは単なる「ドラフツマン」に過ぎなかったと断じたジョン・アダムズの嫉妬とをめぐりきわめて“人間くさい”逸話に至るまでが生き生きと「物語られ」ている。そして独立の思想史的背景として、著者は広く大西洋世界において理性の覚醒を促した啓蒙主義の流布に加え、ピューリタニズムの反抗精神と「大覚醒」運動に触発された民衆の澎湃たる信仰復興の気運を付け加えることを忘れていない。すなわち「理念の共和国」の出発は、また同時に「キリスト教国アメリカ」の出発でもあったというのである。

本書に展開される共和国アメリカの誕生史において、独立宣言はそのちょうど折り返し点を画している。つまりそれは本国と植民地との紛争の到達点を表示するとともに、独立共和国の出発点を表示しているからである。紛争の起点となった英仏間の七年戦争（フレンチ・インディアン戦争）から独立宣言までが20年、独立宣言から革命戦争と建国の（すなわち本書の物語の）最高のヒーロー、ワシントン大統領の離任までが20年、この計40年間における建国の父祖たちの時に協働し、時に交錯し、対立する思想と行動の叙述が、本書の根幹をなしている。

しかしながらその根幹を取り巻き、その背景をなす植民地社会の歴史的特質をあきらかにするために、著者は独立宣言の成立を論じた第1章に続く二つの章において、革命と建国の時代をさらにイギリス植民地の起源にまで戻り、より広い空間とより長い時間のコンテキスト設定を行っている。そのために、著者は植民地建設の指導者たちの治績に触れることはむろん、最新のアメリカ植民地時代史の成果をふんだんに活用しつつ、植民地時代史への社会史的、社会思想史的接近をもはかっている。

そこに設定されたコンテキストの一つは、大西洋をはさむヨーロッパという「文明」とアメリカという「野蛮」の対立に関わっている。第2章において著者は、「文明」による植民の開始から始まり、ヴァージニアとニューイングランドの双方におけるヨーロッパ人と先住民との互いの生存を賭けた血腥い闘争を活写してゆく。本書では、先住インディアンとの恒常的な対峙、戦闘を中心とするこの植民地時代史が、後の革命・建国史に対してもつ意味は、七年戦争におけるインディアンの行動への言及で若干触れられる以外には、かならずしも敷衍されていない。しかし、「植民地建設は野蛮を文明と化すことであるという大義」（本書43頁）が、やがて「オペチャンカナウの戦い」や「キング・フィリップ戦争」に帰結し、ついには19世紀における先住民の追放と殲滅の歴史へと至るといふ本章の叙述によって、著者は先住民問題が後のアメリカ史にあたかも「原罪」のような永続的な思想的刻印を残したことを確かめている。それがベトナムからイラクへといたる現代アメリカの理解にとって示唆するところは自明であろう。

第2章から第3章にまたがって設定されているもう一つのコンテキストは、神により「荒野に使われた使者」という自己像にしたがって当初は世界と人類に対し模範となるような「丘の上の町」を建設すること目指したアメリカ・ピューリタン社会のその後の変容に関わっている。ニューイングランドにおけるそのような「聖なる実験」が、外からは「ジェノサイド」や「民族浄化」の様相を呈しつつあった対先住民戦争という脅威、また

内にあつては信仰の力によつても抑えきれない私益や快樂や贅沢の追求という「人間性」そのものの脅威という、内外二重の危機に直面したとき、ピューリタン社会には原理主義への回帰傾向が生じたと著者はいう。1692年にマサチューセッツ湾岸植民地セーラムに発した魔女裁判は、それが最も極端な形をとつて現出した事例であり、著者はそこにその後も幾度かアメリカ社会が危機に直面したときに噴出した不寛容と集団ヒステリーの原型を見ている。そうすることによつて、ここでも著者は「9.11事件」以後のアメリカにおけるキリスト教原理主義の台頭と少数意見に対する抑圧傾向にあらためて警鐘を發している。

しかし、ここで読者として注意すべきことは、先住民殲滅と魔女狩りという植民地時代史の暗黒面を強調しているからとつて、著者がけつして対先住民戦争や魔女狩りにアメリカの「本質」を見ているわけではないことであろう。もとよりアメリカ史をくまなく知る著者は、かねてより「一つのアメリカ」を語ることに懐疑的であり、「真のアメリカ」や「アメリカの本質」を安易に一義的に規定することにも警戒的であり続けてきた。その著者にとっては、イギリス植民地の二つの起源であるヴァージニアもニューイングランドも、特定の時代のアメリカの一側面をなしていたにすぎない。にもかかわらず、それらアメリカ建国の最も古い礎となつた植民地は、それぞれの歴史的かつ地域的な特殊性にもとづき、一つは同質な独立自営農民の「自由の帝国」という、もう一つは同質な信仰者の「共和国」という自己規定に執着したばかりか、それらの特殊な自己規定こそがおのづから「真のアメリカ」を規定してゆくに違いないという自己中心的な思いこみにとらわれてきた、と著者はみる。著者によれば、こうした人びとの同質性を絆とするアメリカ規定は、その裏面に異質な他者に対する排他性という社会病理を免れなかつた。それらいずれのアメリカの自己イメージも時代的制約をまぬがれえず、その後の歴史のテストに耐ええなかつたとされる。

本書は、こうした排他的なアメリカ像に対し、もう一つのアメリカの起源をオランダ植民地に起源をもつニューヨークのうちに求めている。そもそもが多元的な文化的背景をもつ多様な人口を含むこの都市においては、アメリカにやつてきた移民たちの異質性はそのままに容認され、そこには他者を排除するよりは受容する文化的志向が開花したのであつた。著者は、このニューヨークにこそ、アメリカの本質を、というよりは最良の「アメリカらしさ」を見ている。1950年代にはじめアマースト・カレッジに留学し、コロンビア大学に移つてそこで数年を過ごした著者にとって、ニューヨークはまさに今日にいたるまで、より良きアメリカが發展させ、より良きアメリカを發展させてきた多様性と寛容の精神の象徴にほかならない。20世紀において「トランス・ナショナル・アメリカ」のヴィジョンのもとに多様性を許容しつゝ変容を繰り返していくアメリカを構想したランドルフ・ポーンが、早くから著者の思想的ヒーローの一人であつたことはアメリカ研究者の間ではよく知られていようが、それはけつして偶然ではない。

さて植民地社会の發展にともなう「文明」と「野蛮」のせめぎ合いから生じたアメリカ的な問題の提出に続き、第3章の末尾では、七年戦争の勃發と若き軍人ワシントンの登場、指揮官としての彼の敗戦経験と成長の軌跡が紹介される。そしてそれを導入として、本書第4、5章の叙述は、いよいよ七年戦争後のイギリス本国と植民地の対立の激化、軍事紛

争の勃発、独立の決定、そしてこの革命と独立の軍事的、政治的過程といった革命史のいわば佳境へと進んでゆく。いうまでもなく革命時代史は、これまでのアメリカ史研究のなかで最も研究の集中してきた分野の一つである。そこに積み上げられた膨大な数に上る個別研究を背景とすると、一定の視座からそれらの総合を目指す本書の物語の中に、先行研究によって指摘されたことのない新しい史実はないといってよい。しかし、このよく知られた革命の軍事・外交過程について、それを文字通り領導した二人の指導者ワシントンとフランクリンにもっぱら光を当てて再構成した点に、本書のユニークな視角とそこに込めた著者の意図をうかがうことができよう。

ワシントンとフランクリンの二人はともに（前者が生まれながらの、後者が一介の印刷工から身を起こしたという違いはありながら）、アメリカという当時の大西洋世界においては「プロヴィンシャルな」（109頁）植民地社会が一世紀以上におよぶ発展と富裕化の歴史を経てようやくに生み出した自生のジェントルマン階級に属していた。

ワシントンは大陸軍を率いて独立戦争を指揮するなかで、しばしば軍事的な逆境や敗北に直面しながら、それらをつねに冷静さと忍耐力をもって克服していった。「ワシントンは沈着で、辛抱強く、自己の失敗から学ぶ力を持っていた（これらは恐らく、ジョージ三世にはすべて欠けていた資質であった）」（116頁）のである。であるからこそ「ワシントンは、部下の意見をよく聞き、情報収集を心がけ、その上に立って統率力、判断力をよく働かせ、迅速な実行力を発揮するという、優れたリーダーシップを発揮する将軍に成長していった」（126頁）。著者によれば、ワシントンのこのような危機のリーダーとしての優れた資質は、一つにはヴァージニア有数の大プランターの家に生まれた彼が受けた指導者となるべき教育とプランテーション経営の経験によって育まれたという。たしかに大プランターとしての出自と利害関心も、本来むしろ保守的で謹厳なワシントンをしていかに革命へと誘っていった要因であったかもしれない。しかし、それだけではなかったろうと著者は見る。それ以上に著者が重視しているのは、辺境のジェントルマン階級にまで波及し、そこに生まれたワシントンをしてプロヴィンシャルな環境を越えさせ独立革命へと誘っていった思想的動機、18世紀大西洋世界のより大きな思想史的文脈に連なる歴史観、世界観であるように思われる。著者は言う。

ワシントンは、問題は決して大農園主たちの経済的私利私益のためだけではなく、また課税をめぐる植民地と本国の争いにもとどまらないのであって、人類の解放のための、根本的変革を求める戦いとなるのだと確信したという。啓蒙主義的なこの信念が、苦難の連続だった独立戦争を戦い抜く力となったといえるだろう。（115頁）

一方、独立に向けてアメリカとフランスとの同盟条約を成立させ、革命外交の主役を担ったフランクリンの前半生は、ワシントンのそれとは対照的に立志伝的色彩が濃い。プロヴィンシャルな植民地アメリカの才能有る一青年が、貧窮から身を起こし立身を遂げるために、ロンドンやパリといったヨーロッパのメトロポリスを目指したのはある意味で自然であったといえよう。たぐいまれな才能と勤勉によって、メトロポリスでの成功をかちとり、ついに富を得たフランクリンが「生活のために働き続ける必要のない」「紳士ジェントルマン」となったのは、彼が42歳のときであった。ついで七年戦争勃発の年にイギリス王立協会員に選ば

れることでさらに「イギリス化」したこのジェントルマンにとって、本国への忠誠心をふり捨てて独立革命に献身することは決して容易ではなかったろうと、著者は指摘する。ましてや同盟条約締結のために交渉使節としてパリに派遣されたとき、フランクリンはすでに齢七十に達しており、その地で1783年の英米講和条約成立まで、老躯にむち打って獅子奮迅の外交活動を展開したのである。

ここに至るまでのフランクリンの足跡に一貫する原理を、著者は「公共のための奉仕」の精神とみる。著者によれば、フランクリンの一生はその公共精神が「最初は友人のため、さらにフィラデルフィアのため、ペンシルヴェニア植民地のため、イギリス帝国のため、独立の大義のため、講和条約成立のため、連邦憲法制定のため」(140頁)と拡大適用されていった跡であるという。そしてフランクリンについても著者は、究極的には奉仕精神が「人類の福祉」という18世紀的な啓蒙主義の大義にまで及んでいることをつけ加えている。

かくしてワシントンとフランクリンを主役に据えて革命史を叙述した本書の意図はあきらかであろう。両者ともそれぞれに私利私欲を有し、その意味で聖人君子ではない。しかし、彼らの私的利益は、18世紀啓蒙主義の思想的影響下において公共的大義により理性的に統御されている。おそらく著者はこの啓蒙された個人的利益のうちこそアメリカ革命の根本的な推進原理を見ているのであろう。それこそは、まったく異なった出自のワシントンとフランクリンとが、まったく異なった分野とまったく別の状況で、しかし共通に示す熟慮や均衡のとれた判断力や揺るぐことのない大義への信念といった革命を成功に導いた精神の起源をなすものであると著者は認めているように思われる。

合衆国の建国の過程が主題となる第6章以降、ワシントンとフランクリンは歴史の表舞台から後景へと引き下がってゆく。ワシントンは、独立戦争に勝利した後いったん公的生活からマウントヴァーノンに戻り、フランクリンもその波乱に満ちた人生の終幕を迎えつつあった。本書の物語の主演は、こうしてマディソン、ハミルトン、ジェファソン、ジョン・アダムズらの群像へと引き継がれてゆく。しかし、著者の描く建国の過程を見る限り、革命の過程でワシントンとフランクリンが示した開明的な私益とうまくバランスされた公共哲学、啓蒙的な普遍主義、政治的現実性を支える知的な柔軟性と熟慮といった危機のリーダーの備えるべき人格的諸条件は、これらの新しい指導者たちにも引き継がれていったものと思われる。ワシントンとフランクリンは、あたかも守護聖人のごとく、言葉少なに立憲の過程を見守る立場に立つのである。そして、フランクリンが新しい憲法案に対する感動的な讃辞を残して世を去った後に、ワシントンは批准された憲法下初代の大統領としていま一度公的生活に復帰し、後継者たちの間の対立が日を追って激化してゆくなかで、文字通り新しい共和国統合の要の役割を担うことになる。

あらためて指摘するまでもなく、近代的な国家の建設には、中央政府を中核とする統治機構の設立 (state-building) という側面と一体としての国民の創出 (nation-building) という側面とが含まれる。アメリカ建国の困難は、一つには本国から独立した13のコロニーズが、その時点で13のステイツへと生まれ変わり、さらにそのもう一段上に中央政府を編制する必要が生じたという事情によっている。また一つにはそれは、一体としての国民を想起するには、当時のアメリカの人口が出身国、民族、宗教、生活文化どれをとっても

すでにあまりにも多元的であったという事情にもよっている。本書第6章、7章では、フィラデルフィア憲法会議とついでそこで採択された憲法案の批准の過程をとおして、この二つの難問に当時の指導者たちがいかに取り組んだかが述べられている。

これも歴史家によって幾度となく再現されてきたフィラデルフィア会議についても著者は、標準的な知見をもとに巧みに物語を紡いでゆく。おそらくアメリカ政治思想の歴史のなかでも、この会議ほど多くの創造的なアイデアが集中的にかつ縦横に飛び交った場合は、その後ついになかったといつてよいであろう。この会議についても、著者の関心は、そこに生まれた憲法思想の完成態を出来合いの用語によって解説することなどにはなく、あくまでも会議の出席者たちの不完全ではあるが熱気をはらんだ発言をとおして、新しい政治思想が明瞭で普遍性をおびた形をもって誕生する瞬間を、すなわちアメリカ共和国形成の瞬間をとらえようと試みているかに思われる。そこには、それぞれに長所も欠点もある若き建国の父祖たちが、自己の見解の実現をはかって苦闘する姿が生き生きと再現されている。

これもよく知られてきたように、このような建国の父祖たちの対立と戦いは、新憲法が完成を見、ワシントン大統領の下にいわば挙国一致的な政権が成立したからといって、即座に終焉を見たわけでは決してなかった。第8章では、ワシントン政権下における「党派間」紛争の様相が語られている。権利の章典について、公債処理など階級間、地域間紛争の火種を含んだ経済的争点について、そしてフランス革命という最も危険な対外争点について、紛糾する党派間対立は、ワシントンのカリスマ的な統合的リーダーシップをもってしても封じ込めることはできなかった。著者は、ここでむしろこれだけの激しい内部対立を、言論をもってつきあわせたからこそ、国家統合が促されたと示唆しているように思われる。

アメリカ建国のもう一つの障碍、アメリカ国民の一体性創出に関する困難についてはどうであったろうか。アメリカ国民の創出は「南北戦争」の経験を経なければならなかったとするビアード以来の所説はおくとしても、もとよりこのコミュニケーションの未発達な広大な新国家にあって単一的で絶対のアメリカ人意識は得難かったことは否定できまい。しかし、著者は『『ナショナル・ユニオン』が、国民全体および各個人の幸福にとって測りしれない価値を持つという、ワシントンがアメリカ革命を通じて抱き続けた信念』（241頁）の内に、そしてそのワシントンが国民の絶対的信頼を得ていた事実の内に、将来的な国民統合の確かな萌芽を見ている。もう一点つけ加えるならば、建築、服飾、飲食文化、美術、文学にも深い造詣を有する著者は、本書の各所でさりげなく、二世紀にわたって発展してきた植民地社会の隅々に「アメリカの様式」、国民文化が芽吹いていたことを書きとめている。

ワシントンの有名な「告別演説」をもって終わる本書は、かくして単純な危機のリーダーシップの成功物語として終わっているわけでは決してない。コンセンサス史学の影響を諸処にうかがわせながらも、本書がカバーする40年、否、植民地開拓以来二世紀近くに及ぶアメリカ史は、むしろアメリカという共同体を襲った連続的な危険と紛争の物語であるとすらいえよう。評者には、本書の最も根本的なメッセージは、アメリカがまさにそうした危機に対するアメリカ人たちの創造的対応のなかから生まれてきた事実を伝えるところにあるように思われる。

さてこのようなメッセージをポスト・モダニズム、ポスト・コロニアリズム、ポスト・マルティカルチュラリズム、そしてポスト・「9.11 事件」の時代にある後続のアメリカ研究者たちは、どのように受け止めるべきなのだろうか。それを先行世代による「古き良きアメリカ啓蒙の夢」として一擲することは、おそらくあまりに安易な反応といえよう。早い話が、現在のアメリカ研究者のどれだけが、アメリカの現状を的確にとらえ、そこに自らのアメリカ研究をつなぎ止めているであろうか。あるいはどれほど自らの研究を達意の日本語で一般に物語るまでに咀嚼しえているであろうか。物語という一見軽い形態をとっているにもかかわらず、本書がその下に隠すアメリカ研究者への問いかけは意外に重たいといわなければならない。